

教育実習における事前指導の現状と工夫・改善 —教育実習日誌の指導・助言を参考に—

切 手 純 孝

第一工業大学 共通教育センター 教授 〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2

E-mail s-kitte@daiichi-koudai.ac.jp

The current state of the prior guidance, device and improvement in the student teaching

In reference to the instruction advice of the student teaching diary

The advice of the charge instruction teacher in the student teaching diary which the student who finished student teaching submitted is valuable at all with the appropriate and concrete advice in various scenes, so we notice that reference wise sayings are studded with there.

Therefore, this report describes "guidance of preparedness and attitude faced student teaching" and "improvement of learning leadership in teaching practice" that actually working at prior guidance of the student teaching, while consulting instruction advice of the charge guidance teacher written on the student teaching diary.

Key words : student teaching, prior guidance, student teaching diary, charge instruction teacher, wise sayings,

1 はじめに

最近の学校現場を取り巻く喫緊の課題として、不登校やいじめ問題等があげられる。平成 24 年度の中学生の不登校の数は 9 万 4836 人で、37 人に 1 人の割合となっている。これは 1 クラスに 1 人は不登校の生徒がいることになり、決してゆるがせにはできない状況である。過去 10 年間を見ても、中学生の不登校の数は約 9 万 5 千人前後の値を推移しており、生徒数の減少を勘案すると、相対的には横ばいかあるいは増加の傾向にあるといえる。教育現場全体で危機感を持って様々な対応や取組みがなされているにもか

かわらず一向に減少しない現状は憂慮すべき事態といえる。

また、平成 24 年度に実施された「いじめ緊急調査」における「いじめ認知件数」は、当該年度 4 月から 9 月までの半年余りで小・中学校合わせて 14 万 4054 件であった。都道府県によっていじめの認知自体に差異があることを考慮しても、統計に表れた膨大な数のいじめの認知件数には驚きを禁じ得ない。いじめの問題は 1980 年代半ばと 1990 年代半ばに社会問題として大きく取り上げられたが、その後は学校現場での熱心な取組みが功を奏して、いじめ自体が影を潜

めたかのように思われていた。しかし、実際は減少するどころか、むしろ潜在的かつ陰湿ないじめの実態があったことを窺わせ、いじめ問題の根深さと対応の難しさを改めて思い知らされる思いである。

このように様々な問題を抱える今日の教育現場にあっては、教師に求められる役割や使命も多岐に渡る。教師の本分である分かりやすい授業の実践は勿論のこと、一人一人の生徒に対する深い理解や教育的愛情を兼ね備えたより人間的に深みのある教師が求められており、ただ単に教科内容を教科書に沿って教えるだけの教師では不十分なのである。人間性を重んじた全人的な指導・援助ができる教師が求められているといえる。

そして、このことは教育実習に臨む学生にも当然要求されるものと思われるが、まだまだ自身が発展途上の学生にとっては非常に難しい課題といえる。しかし、たとえ教育実習生であろうとも3週間の実習期間においては、第一線で指導に当たられる現場の先生方と同様の指導・援助を求められることから、少しでも現場のニーズに応えられるように、大学としても教育の現状に即した事前指導を工夫することが求められる。

教育実習の実施に当たっては、平成18年7月に文部科学省から出された「教職課程の質的水準の向上」(答申)の中の(3)教育実習の改善・充実—大学と学校、教育委員会の共同による次世代の教員の育成—にその論拠をみることが出来る。即ち、大学においては教育実習の円滑な実施に努めることを、法令上明確にすることが必要であり、履修に際しては満たすべき到達目標をより明確に示すとともに、事前に学生の能力や適性、意欲等を適切に確認し、場合によっては教育実習に出さないという対応や、教育実習の中止も含め、適切な対応に努めることが必要であると述べられている。

これは、教員としての資質を欠いたり、免許

取得だけが目的だったりする教育実習生については、ケースによっては教育実習に行かせないという強い指導も必要であるとの指摘である。即ち、教育実習に送り出す大学側が学生の適性や意欲を十分に確認することが重要であることを指摘している。

教育実習生を送り出す大学においては、教員としての資質を兼ね備えた学生をいかに育てるか、教育実習に臨む学生の姿勢・態度をいかに醸成するかが重要であり、更には授業を実践するときの学習指導力を確実に身に付けさせ、学生が自信を持って教育実習に臨めるように指導することが必要だといえる。

本学で教育実習を担当するようになって5年が経過した。今回は、その間に教育実習を終えた学生が提出する「教育実習日誌」に着目し、その中でも特に担当指導教諭の先生方が書かれた指導・助言を参考にしながら、より現状に即した事前指導の在り方について考察を行った。すると、そこには様々な場面における貴重な指導・助言が適切かつ具体的に書かれてあり、実習生を送り出す大学にとって、参考にすべき金言がちりばめられていることに気付かされるのである。

そこで本稿では、教育実習日誌の中に書かれている担当指導教諭の指導・助言を参考にしながら、本学において教育実習事前指導の中で実際に取り組んでいる「教育実習に臨む心構えと姿勢・態度の指導」並びに「授業実践における学習指導力の向上」について述べる。

2 教育実習の状況と実態

本学における教職課程で取得可能な教員免許状は、中学校の「数学」と「技術」、高等学校の「数学」「情報」「工業」である。この中で、全学科で取得できるのは中学校の「技術」と高等学校の「工業」である。また、中学校の「数学」と高等学校の「数学」は航空工学科で、高等学校の「情報」は情報電子システム工学科と

機械システム工学科で取得ができる。

本学における教職課程の履修の流れは次のようになっている。まず7月末に5学科の全1年生を対象に教職課程オリエンテーションを実施し、9月末には教職課程履修の希望者に対して学科ごとに個人面接を行っている。その中で、それぞれの免許状取得について具体的に説明を行った後に、教職課程履修の申込を受け付けている。

そして、1年生の後期から教職に関する科目の講義が開始される。さらに、2年生以降になると教職に関する科目と並行してそれぞれの専門教科に関する科目の講義も行われる。

更に、3年生の夏季休業中には学生自ら教育実習の予定校を訪問して、教育実習についてのお願いをし、内諾を頂いて来るように指導している。そしてその結果を大学へ報告することになっている。なお、教育実習は4年生の6月と9月に実施している。

また、本学では教育実習を履修するに当たっては、以下の条件を満たしていることが必要である。

- 教師論、教育原理、教育経営論、教育課程論、教育心理学、道徳教育、特別活動論、教育の方法と技術、生徒指導論、教育相談の中から8単位以上を修得していること。
- 数学科教育法、技術科教育法、工業科教育法、情報科教育法の中から1科目以上を修得していること。
- 教科に関する科目の中から、10単位以上を修得していること。

このような厳しい条件をクリアした学生だけが教育実習を行うことができるシステムを取っている。

教育実習生の人数は年度によって多少ばらつきはあるが、平均すると17名程度である。校種別では、中学校が12名程度、高校が5名程度である。

また、都道府県別では地元の鹿児島県が9名

程度と最も多くなっている。次に多いのが沖縄県で4名程度となっている。それ以外も九州管内がほとんどを占めている。

＜過去5年間の教育実習生の状況＞

教育実習年度		2009	2010	2011	2012	2013
校種別	中学校	9	16	22	3	11
	高校	3	1	5	10	5
	合計	12	17	27	13	16
都道府県別	鹿児島	5	10	14	8	8
	沖縄	3	3	7	3	3
	宮崎	3		1	2	2
	福岡		2	3		1
	その他	1	2	2		2

実際に教育実習を行う学校としては、出身校での教育実習が多くなっている。それ以外では、教育実習の提携校である霧島市立国分中学校、鹿児島県立隼人工業高等学校、私立鹿児島第一中・高等学校の3校で行うことになる。

3 事前指導における工夫と改善

(1) 教育実習に臨む心構えと姿勢・態度の指導

教育実習日誌の中に記載されている担当指導教諭からの指導・助言の中で、最も多いのが「教育実習に対する心構えと姿勢・態度」についての指摘である。この点については本学でも、事前指導だけではなく関連する教職科目の講義の中においても特に力を入れて取り組んできたつもりである。しかしながら、実際にどのような取組みを行ったらより現状に即した効果的な指導につながるのか模索を続ける状況であり、教育実習校の担当指導教諭の先生方からの指導・助言は大学にとっても大変参考になるものとする。

教育実習日誌の中の指導・助言では、教師とはどのような職業であるかをより具体的な言葉で分かり易い表現を用いて指摘されている。また、様々な場面において生徒を指導・援助する際の教師の姿勢・態度の大切さについても述べられている。

その中のいくつかを抜粋して以下に示す。

- 教師は常に「生徒を正しく見る目」「感じる心」「育てる技術」を生徒に学びながら、共に成長し続けることが大事であると思います。そのためには、生徒が示す小さな反応も見逃さないことです。
- 教師自身が「生徒に分かって欲しい、できるようになって欲しい」との思いで一生懸命に取り組むことで、生徒は必ず応えてくれます。生徒は教師の鏡です。教師の姿が生徒の行動に繋がります。
- 教職に対する強い情熱を大事にしたい。そして、教育の専門家としての確かな力量と総合的な人間力を身につけるための研鑽に励んでください。
- 教師の仕事は「人を育てる」「人を作る」仕事です。いろいろな職種がありますが、「人を作る」ことができる唯一の仕事だと思います。ですから間違いに気づいたら即指導、そのままにしておくとうまくいったままになってしまいます。
- 実習の中で、いろいろな面で足りないところがあるのは当然です。しかしそこで諦めるのではなく、少しでも改善していく意志と行動が大切だと思います。人に教えることがどれだけ難しいことか、この教育実習で学んでほしいです。
- 実習生には4つのタイプがあります。「①ただしゃべるだけ、②説明するだけ、③実際にやって見せる、④心に火をつける」です。もちろん番号が上がっていくほど良いのです。言葉は「心に火をつける」一番のきっかけとなるものです。言葉を磨くことは教師にとって最も大切なことです。
- どんな職業でもそうですが、成功に向かう第一歩として、まずその職業に興味・関心を持つことが大事です。私は教師になる前は民間企業に勤務しており、上司からそのことを何回も言われました。特に教師という職業は授業だけでなく学級経営、事務処理、部活動指導等とその業務は多岐に渡ります。今回の実習

期間に教師という職業に少しでも興味を持ってもらえたら嬉しいです。

このような指導・助言をもとに、事前指導を実施する上での工夫・改善として本学が独自に取り組んでいるのが「①現職のOB教員による『教育講演会』の実施、②教育実習に臨む心構えと決意の作文指導」の2つである。

さらに本学では、3年生の夏季休業中に学生自ら教育実習の予定校に「教育実習の内諾書」を持参し、教育実習について話を伺ってくるように指導している。学生は中・高等学校の先生方と直接話をするこゝでようやく教育実習を現実のものとして認識するようである。即ち先生方から学校現場の話を直接伺うことで教育実習へ望む決意や自覚が生まれてくるものと考えられる。

① 現職のOB教員による『教育講演会』の実施

中学校の技術や高等学校の工業を担当しておられる現職の本学卒業の先生方をお招きして講演を行っていただく「OB教育講演会」を計画して、毎年2回（3年生の前期と後期）実施している。

その中で、OBの先生から現在の学校が抱えている課題や問題について、スライドや写真等を使って具体的にお話を頂いている。そして、それらの課題や問題に対する現場の先生方の実際の取組みについても具体的にお話を頂いており、学生は非常な驚きと感動をもって講演に耳を傾けている。

さらに、先生自身がどうして教師を目指すようになったのか、教員採用試験にどのように取り組んだのかなど、より具体的な経験談についても話をされると学生たちの目が一段と輝きを増してくるのが感じられた。

以下はOB講演会に参加した学生から提出された感想・意見の一部を抜粋したものである。

<学生A>

先生という職業は、授業をして給食を食べて、部活動の指導をしたりするんだろうな？くらいの認識でしたが、もちろんそれだけではなく、企業訪問などの出張や面接指導、書類のチェックなど、生徒の人生や将来に真剣に向き合った重要かつ大切な役割を担っているのだと改めて実感しました。しかも、両親からのクレームやいじめ問題など仕事は山積しており、本当に熱意を持った先生でないと正直勤まらない職業だなと思いました。

しかし、当然それ以上の喜びもあるわけで、大変だけど奥が深い職業だと思いました。自分にとっても印象の深い先生方はたくさんいますし、様々な職業の中でこれほどたくさんの人の人生に自分自身を刻んでもらえる仕事はないと思います。

部活動、修学旅行、合宿などの楽しい思い出や人生相談などで支えてもらった思い出は、それぞれの生徒の心に恩師として一生刻んでもらえるので最高の仕事だと感じました。

<学生B>

先輩の先生の講話を聞いて、教師が生徒を理解することの大切さを改めて実感しました。その中でも特に生徒の将来をしっかりと考えての生徒理解が大切であると思いました。進路選択における就職指導では、様々な職種の中から一人一人の生徒の適性に合った職業を紹介することは大変難しいことだと思います。しかし、教師が生徒一人一人を理解していたら、その生徒の適性に合った企業を探し、就職へと導くことができることが分かりました。

また進学については、現在は大学への進学よりも専門学校への進学が増加しているように私は感じます。それは、専門学校は資格が取れるからではないかと考えます。進学における指導でもそれぞれの生徒の将来を見据えた適切な指導が大切であると感じました。

<学生C>

私は教師に憧れています。今日の講話を聞きその憧れは一層増しました。そして自分もまだまだ遅くはないと思うようになりました。初心を忘れず信念を持って諦めずに勉強を続けることで自分の道を切り拓くことができると確信することができました。そしてまた苦悩する自分自身の生き様が将来出会う生徒たちの生きた教材になっていくことも分かりました。やればやっただけの結果が出て、それぞれの生徒の将来の役にも立ち、素晴らしい思い出と教え子ができる素敵な職業だと感じました。

先生が「生徒のプロデュースをする」という表現をされた時に、私自身もまた今まで出会った先生方に、それぞれの生徒がそれぞれの場面で主役になれるような配慮のもと、学校生活を送らせてもらっていたんだということを実感してとても感動しました。私が教職に就けても、他の職業に就いたとしても、誰かの人生に寄り添い、その人の心に残るような影響力のある人に成長したいと思いました。

現職の先生方が語る仕事上の様々な悩み、苦労、やりがい等についての話には、やはり説得力がある。学校現場に即した現実的な話の内容は学生たちの意識を高めるとともにモチベーションの向上にも一役買っているようで、これから教育実習に臨む学生にとっては、何よりも心強い応援メッセージになっているように感じる。

講演終了後の質疑応答でいろいろと質問をする学生の姿には、少しでも自分の不安を解消させたいという積極的な姿勢・態度が窺え、講演会開催の意義を実感させられた思いである。

② 教育実習に臨む心構えと決意の作文指導

教育実習を行う上での心構えと姿勢・態度を再確認する意味から「教育実習に臨むに当たって」というテーマで学生に作文を書かせ、教育実習日誌の最初のページに掲載して、実習校の先生方にも見ていただくようにしている。

どうして教師を目指すようになったのかを再度思い出して文章にすることで、改めて教育実習に対する決意や教育実習に臨む心構えを自分自身のものとして明確にすることができると思う。

個別に作文指導を行う中で、特に意識している点は教師を目指すキッカケになったこととどのような教師になりたいかの二点について具体的に自分の言葉で表現させることである。何回も何回も推敲を重ねる過程を経て教育実習に対する自分の決意を改めて再確認するとともに、その過程が教育実習に対する意識化につながると考えるからである。その作文の一部を紹介する。

<学生D>

私は第一工業大学に入学する際に大きな二つの目標を掲げました。その一つは専攻している情報・電子に関する事柄を学び、高校生活で得ることの出来なかった知識と技術を習得することです。現在はこれまで学んできたことを活かして卒業研究でAndroidアプリの制作に取り組んでいるところです。

また、もう一つの目標は「教師」になるために教員免許を取得することです。そのきっかけとなったのは高校時代のK先生との出会いでした。先生には勉強の悩みは勿論のこと、部活動等での悩みもいろいろと聞いていただき、アドバイスをしてもらいました。このK先生との出会いがきっかけで自分も将来教師になりたいと思うようになりました。

<学生E>

私は入学した時に、大きな二つの目標を掲げました。その一つは専攻している航空工学に関する多くの事柄を学び、技術者として必要な知識と技術を習得することです。もう一つの目標は、「高校の教師」になり、生徒たちの心に寄り添った教師になるべく教員免許を取得することです。

私が教員を目指すと思ったのは、私の

高校2・3年生時の担任のT先生の影響に寄るところが大きいと思います。私は高校1年生の終わりから学校にあまり行かなくなりました。そんな時、担任のT先生が大事なプリントがあるからといって私の家まで何度も足を運んでくださったり、いざ自分が学校へ行くと、些細なことでも褒めてくださったりして、私の大きな心の支えになってくださいました。時には厳しく叱られたりもしましたが、それも私を思っていることだと思うと気持ちを奮い立たせる糧となりました。

また、担任のT先生だけでなく、色々な先生方から声を掛けていただきました。今思うと、私のような学校に行けない生徒や様々な悩みや問題を抱えている生徒に対して、学校全体で親身に取り組んでくださっていたことを感じます。

私は自分と同じような悩みや問題を抱えている生徒たちに対して、自分が先生方から援助して頂いたように、今度は自分が教師という立場になって手助けができるようになりたいと思います。

そのためにこれまでの3年間、専門の勉強の傍ら、教職に関する教科を学び、単位を取得してきました。

<学生F>

私は第一工業大学への入学に際し、大きな二つの目標を掲げました。その一つは野球部に入り大学野球の全国大会である明治神宮大会に出場することです。もう一つの目標は、幼い頃からの夢である「中学校の教師」になり、生徒の心に寄り添った教師になるべく教員免許を取得することです。

そのきっかけは小学校の教師をしている父の影響が大きいと思います。今でも10年以上前の教え子たちから連絡があり、「〇〇が結婚します。結婚式に参加してください」と言われ嬉しそうにしている父を見て、たくさんの教え子に影響を与え、今でも慕われている父を誇りに思うと同時に羨ましく感じました。私も父のようになりたいと思いました。

しかし、父と同じ小学校の教師ではなく、中学校の教師になりたいと思ったのは、幼い頃から12年間続けてきた野球の監督をしたいとの思いからです。大学まで高い目標を持って取り組んできた野球を活かし、これからも野球に長く携わっていきたいと思っています。教科指導、生徒指導は勿論のこと、部活動を通して多くのことを教えることのできる教師になるのが私の夢であります。

(2) 授業実践における学習指導力の向上

授業実践においては、多くの学生が最初の1回目は緊張と不安からどのように授業を行ったのかほとんど覚えていないと話す。しかし、授業実践後に指導教諭から受ける指導・助言を経て多くの示唆を受け、そしてそれらを次回の授業実践に活かすことで、不安は自信へと変わり意欲を持って授業実践に臨めるようになったと感想を述べている。

その時の指導教諭の指導・助言が教育実習日誌の中に掲載されている。その一部を抜粋して以下に示す。

- 授業指導の技術的なところはまだまだで当然ですが、熱意をもって指導すれば悩む生徒は応えてくれます。生徒のために1コマの授業で何ができるかを常に考える教師であって欲しいです。
- 授業においては、何事も準備がすべてであります。いい準備が自信となり、生徒にとっても分かり易い授業になります。
- 授業の準備は「これぐらいでいいや」と妥協するのではなく、もっと深く教材研究をするべきです。
- 授業を進めることばかりに気を取られて、一方的な話や説明が多くなると生徒の学習意欲は低下します。多くの生徒に発言させたり話し合いの時間を設けたりするなど、生徒が主役の授業を試みることも考えてください。

- 教師という仕事はとてもやりがいのある職業です。その仕事の中で最も大切なのが授業です。「授業が命」という言葉もあります。授業がまともにできない教師は生徒から信用されません。
- ある程度の授業準備は出来ていますが、これに満足することなく目標を高く持って欲しいです。指導案も初めて作成してもらいましたが、確認不足が見られました。何度も徹底して確認をして、ミスがないようにしてください。
- 生徒に対して、どのように接していけばよいか迷うことも多いと思います。初対面の生徒にいきなり注意しても効果はありません。授業を通して生徒と信頼関係を築く中で、注意・指導を行っていけばよいと思います。

授業実践については、指導案作成と教材研究の時間を十分に設けて、様々な角度から検討して確認をししっかりと行うことが大切であると指摘されている。さらに、教師にとっては「授業が命」であり、十分な準備とプライドを持って授業に臨むことが重要であるとの指摘もされている。

この点について本学では、それぞれの教科科目「教科教育法」の中で、教材研究の方法と指導案作成の練習を何回も繰り返し行い学習指導力の向上を図っている。さらに、模擬授業を実践する中において分かる授業の工夫、授業の進め方のポイント等についても具体的に学んでいる。また、生徒と信頼関係を築く方法についても大学で学んできて欲しいとの指摘がある。この点については、必修科目である「教育相談」の講義で、生徒との信頼関係を築くための「コミュニケーション技術の学習」で具体的にロールプレイを取り入れた指導を行っている。ロールプレイの実際として、二人一組で先生役と生徒役とを担当し、生徒とのコミュニケーションの場面をシミュレーションしている。その一部を以下に紹介する。

＜吉田君の教育相談（ロールプレイ）＞
 (吉田君は中学2年生男子)

先生 「今日は、何でも話をしているよ」
 吉田 「う～ん。あまり話をするようなことは、何もないです」
 先生 「そう、何もないか。う～ん、何もないか・・・」 **【単純な受容】**
 「学校は楽しい？」 **【問いかけ】**
 吉田 「う～ん。あまり楽しくないかな」
 先生 「そう。あまり楽しくないのか」
【内容の繰り返し】
 吉田 「・・・・・・・・」 **【沈黙】**
 先生 「何かいやなことでもあるのかな」
【問いかけ】
 吉田 「実は、同じ部活の田中君が最近、僕を避けるようになったんです」
 先生 「同じ部活の田中君が、吉田君のことを避けるようになったんだ」
【内容の繰り返し】
 吉田 「そうなんです。僕が声をかけても聞こえない振りをしたり、黙って通りすぎたりするんです」
 先生 「そうか。田中君が君のことを無視するようになったんだ」
【感情の反射】
 吉田 「そうなんです。僕を無視するんです」
 先生 「それは、気になるよな」
【問いかけ】
 吉田 「ええ。僕は何にも悪いことしてないのに・・・・・・・・」
 先生 「そうなんだ。吉田君自身は、何も思い当たることはないんだ」
【内容の繰り返し】
 吉田 「はい。・・・」 **【沈黙】**
 先生 「もし、気になるようだったら、直接田中君に話してみたらどうかかな？」 **【指示】**
 吉田 「う～ん、どうしようかな。どうしようかな。・・・」 **【沈黙】**
 先生 「もしかしたら、田中君も君に、話したいことがあるかもしれないよ」 **【問いかけ】**
 吉田 「そうか・・・・・・・・」 **【沈黙】**

「田中君に話してみることにします」
 先生 「そうだな、それがいいかもしれないよ」 **【指示】**
 吉田 「はい、先生ありがとうございました」
 先生 「また、何かあったらいつでも話に来ていいよ」
 吉田 「はい」

4 教育実習を終えての感想より

教育実習を終えて大学に戻ってきた学生たちは、その表情も明るく堂々としており、自信に満ち溢れた大人っぽい雰囲気を漂わせている。学生の教職に対する意識や姿勢・態度が教育実習に行く前と後では、大きく変化していることに気付かされる。教育実習は大学の講義で学んだ諸理論を学校現場で具体的に実践し応用することである。しかし、学んだ諸理論の通りに実習が進むことは少なく、大半の学生は失敗の連続であろうと推測される。しかし、悪戦苦闘しながらも試行錯誤の末につかんだ自信は教育実習後の学生に大きな影響をもたらしているようである。

教育実習後の学生たちの感想として一番多いのが「教育実習を経験して、改めて教師になりたいという意識が強くなった」「是非教師になって、生徒一人一人の将来の自己実現に直接携わっていきたい」というものである。その他にも以下のような感想があった。その一部を抜粋して紹介する。

＜学生G＞

教師の仕事は、生徒との接し方、教壇に立つときの心構え、授業の展開など想像していた以上に複雑でハードで、知識や経験が浅い私は不安が募るばかりでした。そのため最初は、受け身になることが多く、どう接したらよいか分かりませんでした。

しかし、担当の先生からの具体的な助言や熱心な指導を受けていくうちに、何事にも失敗を恐れずに積極的に自信を持って取

り組んでいこうという気持ちが湧いてきました。教育実習を無事に終了して、改めて教師になることへの決意を確信しました。

<学生H>

実習生としての学校生活を送ると、生徒であったころには気付くことがなかった、先生方の授業以外の学校での仕事が多く目に留まった。授業を1回するだけでも大変なのに、それと並行して学校での自分の仕事をこなしておられる先生方は本当にすごいと思った。生徒だったころには知ることでもなかった教師という仕事のすごさを改めて知ることができて本当に良かった。

今回の教育実習を通して、多くのことを学ぶことができ、大変さの中にもやりがいのある教師という職業に一層の憧れを持った。

<学生I>

実際に授業を行ってみて、これまで大学で行ってきた模擬授業とは全く違う雰囲気と緊張感に戸惑い、思うような授業ができませんでした。しかし、指導教諭の先生の助言・指導のおかげで、少しずつ改善することができました。最後の研究授業は校長先生をはじめ多くの先生方に参観していただき緊張しましたが、生徒たちの積極的な授業への参加に助けられ、スムーズに授業を展開することができて感謝しています。

実習中において、本当に上手くいったと思える授業はありませんでした。授業を行うたびに多くの反省点が出てきました。これから更に勉強して、信頼される教師並びに指導力のある教師を目指して頑張っていきたいと思います。

5 おわりに

学校現場を取り巻く様々な課題や問題が山積する今日に於いては、教員に求められる役割や果たすべき使命も多岐に渡る。しかも以前ならば家庭が担っていたであろう役割や使命までも学校に求められており、教員の負担は増すばかり

りである。

世界一多忙と言われる我が国の先生方の置かれている状況は非常に厳しいものがあり、現場の先生方は常に時間に追われるハードな毎日を送っている。そしてその激務さゆえに体調を崩し休職に追い込まれる先生方の数も決して少なくはない。しかしながら、教員の仕事は未来を担う生徒たちの成長の現場に立ち会い、明日の未来を築く素晴らしい仕事でもある。

教育実習は教員免許取得を目指す学生にとっては最難関の科目であるともいえる。実習前の学生たちは、本当に自分に実習が勤まるだろうかと不安に胸が押しつぶされそうになる。しかしながら、3週間の実習を終えて大学に戻ってきた学生たちは、人を育て、未来を創造する教師という職業の魅力に取りつかれ、漠然とした夢をより現実のものへと引き寄せるために、以前にも増して真剣に講義に臨むようになる。そればかりか、実習を終えた学生たちは学生生活の様々な場面でより積極的な取組みを見せるようになり、教育実習は学生の意識にも大きな変革をもたらしたように推察される。

然るに、教育実習の成否が学生の今後を大きく左右すると言っても決して過言ではなく、いかに有意義な教育実習を実践できるかが重要となる。そのためにも、現状に即した即効性のある事前指導を大学としていかに提供するかが問われているといえる。

【参考文献】

- 竹熊真波：教育実習事前指導のあり方についての一考察—教育実習日誌の分析を通じて— 福岡国際大学紀要 No18 2007年
- 永田孝夫：教育実習における授業実習の現状と改善(2)—「教育実習記録」から実習生の授業実習を分析する—愛知大学教職課程研究年報 第3号 2013年